

「ゴルゴ13と世界平和」

ラーメン屋さんなどで待っている間に、店に置いてある漫画雑誌「ビッグコミック」の「ゴルゴ 13」をよく読んだ。そんな付き合い方をしてきたこの漫画が、先般単行本 200 号を超え、単一漫画シリーズで世界一になりギネスに登録されたという。そういえば昔からあるなあと調べてたら、1968 年 11 月創刊という。半世紀を超え 53 年続いており、日本での漫画連載としては 2 番目に長い(1 位はその前年にスタートの聖悠紀「超人ロック」)。

ストーリーは毎回完結で、ゴルゴ 13 と呼ばれる超一流スナイパー(狙撃手)が、国際紛争などの舞台上で引き受けた超困難狙撃をクールに実行してゆく物語である。冷戦が終了した際には「これでゴルゴはネタ切れで連載は困難」と言われたが、シリーズは 650 話を超えて現在も続いている。毎回ゴルゴは人を狙撃しているわけではなく、変わったところではダイヤモンドやヴァイオリンの G 線なども狙撃依頼されているので、延べ何人狙撃したかは不明だが、それでもかなりの人数にはなるだろう。この漫画の面白さは、実際の国際情勢を無頼に起こりそうな設定でストーリーが組まれていること(時には舞台上にされた国から抗議されることもあるようだ)にあるのだろう。

でも前から不思議に思っていることが在る。ケネディ大統領暗殺やオウムの国松警察庁長官狙撃など現実の狙撃事件を見れば明らかなように、戦争状態にない中での狙撃は犯罪だ。狙撃者は暗殺者である。しかし、ゴルゴ 13 が暗殺者として捜査されている様子はない。不可能犯罪なので証拠が掴めないからだろうか。いや、CIA や KGB やある国の大統領などもゴルゴへの依頼者だ。でも誰もその矛盾を問わない。漫画上は法を超えた神のような存在なのだろうか。いやそうとも見えない。正義の味方として依頼内容を分析して「この狙撃に義はあるか」と判断しているかと言え、必ずしもそう思えない。その判断はかなり曖昧だ。引き受けないと話が始まらないからだろう。

そこまで頭の体操をしてきて、ふっと思った。ゴルゴ 13 が神のような存在で、世界の平和を乱す権力者や富豪を狙撃してくれたらどうなるだろう。独裁者や闇の支配者などあつという間にいなくなる。そうすれば少しは平和な世界になるだろう。そこで思考は止まってしまった。それで悪政はなくせるかもしれないが、その後善政が施され平和になる道筋は敷けるだろうか。それは自分たちで築くしかない、だったらゴルゴ 13 に頼むこともしない方が良い。「平和は自分たちで勝ち取るものだ」と世界大戦の経験で痛いほど知らされたのを忘れていたようだ。メルケルが引退したドイツの選挙では、また少数政党が乱立、連立成立まで大変そうだ。で

もこれは独裁への道歩んだヒトラーを再び生まないために工夫された政治ルールの結果だ。日本は如何だろう。世界の「民主主義指数」を見ると、日本は「欠陥のある民主主義」と「完全な民主主義」を行ったり来たりしている。原因は選挙など政治参加の低さだ(米国も似たような指数だが・・)。でも、世界は全く民主主義が該当しない独裁政治国等が過半だ。

ゴルゴ 13 はかなり読んでいる。その中で一番印象に残っているのは、「バスを待つ人々」という話だ。舞台はバス停、バスを待っている人々の中にゴルゴもいる。街で起こったレイプ殺人事件が話題になる。そして……。まるで舞台劇を見るような登場人物の心理の揺れも感じられる異色作だ。そして珍しくこの話には珍しく狙撃が無いが、真犯人が自白するのは、ゴルゴが雇ったバスを待つ人を演じた俳優たちの演出結果だった。

ここまで書いて会報原稿として慌てて出稿した。その翌日の朝刊に「ゴルゴ 13 の作者さいとう・たかおさん死去」の記事が載っていた。偶然か！合掌



☆☆掲示板☆☆

当団体の平山会長がエッセイ集を出されました。

「終列車出発す！」

～しゃべっちょ古稀からの独り言～



エッセイは“寿司”と同じでネタが新鮮なうちに書いて、新鮮なうちに読んでもらうのが一番だろう。5年に亘るものを並べることには多少抵抗感もあったが、敢えて本として出版しようと思いついた・・・(中略)

新潟の方言に「・・こき」というのがある。「嘘こき」(嘘つき)「へっこき」(おならばかりする奴)などのほか、おしゃべりのことを「しゃべっちょこき」と言う。相変わらずの親父ギャグだが、この本のタイトルは、「しゃべっちょ古稀からの独り言」とした。(本文・はじめにより)

この本に関するお問い合わせは下記へ

新潟県生涯学習協会

〒950-8602

新潟市中央区女池南 3-1-2 県立生涯学習推進センター内

TEL・fax 025-250-0121

E-mail: syakyo56@feel.ocn.ne.jp